

盲先覚者伝記シリーズ

4

NAKAMURA KYOTARO

中村京太郎

目を閉じて見るもの

阿佐博



盲先覚者伝記シリーズ

4

NAKAMURA KYOTARO

中村京太郎

目を閉じて見るもの

阿佐博

推薦のことば

日本盲人福祉委員会理事長 実本博次

国連が、1981年を国際障害者年に制定したことにもみられるように、近年、社会の障害者観は大きく変貌しつつあります。特に、文化が深く根をおろした所では、かつてのように、障害者を憐憫の情のみで救済の対象とする風潮は消滅した、といっても過言ではありません。こうした国際的な障害者観の大きな流れの中で、わが国でも障害者の生活は、日一日と社会に統合され、生きがいのある自立したものになりつつあります。

しかし、一時代前に目を転じたとき、今でも民度の低い地域がそうであるように、障害者に対する物心両面からの抑圧は想像に絶するものがありました。視覚障害者だけに限っても、先人が残した心のひずみの記録は、いくらかでも数え上げることができます。同じ障害を持ち、悩みを分かちあえる者が、自ら先頭に立って、いばらの道を切り開いていかない限り、同じ運命に悩み、苦しむ者に光を当てることができない時代であったと言えます。

わが国でも、そのように自らの障害を克服した先覚者は、多数輩出しています。視覚障害者の世界でも、古くは塙保己一、杉山和一といった偉人から、現代の盲人文化や盲教育の基礎を築いた先達まで、数え上げれば枚挙にいとまがありません。

しかし、残念なことに、ごく卓越した人物を除いて、その人の偉業と人となりを伝えるものはあまり残されていません。半ば伝説化した中で、その人の業績が風化しつつあるというのが実状のようです。特に、現代の視覚障害者の生活に直結するような業績を残した近代の先覚者に、その感が深いと言われます。じかに聲咳に接した方々の証言を、今集めておかなければ、やがて忘却のかなたに押し流され、先達の偉業を正しく後世に伝えられなくなる、そんな状況にあるように思われます。

こうした折に、日本盲人福祉研究会が、この伝記シリーズを企画し、刊行することは誠に時宜に適し、大いに意義のあることと思います。こうした地道な仕事を続けておられる同会に対し、深甚なる敬意を表するとともに、視覚障害者の方には、先輩の不屈の闘志とそのさわやかな人生を知っていただくために、また、視覚障害者の諸問題の解決に当たっておられる方には、指針を得るための座右の書として、本書を推薦する次第です。

本書の刊行にあたって

日本盲人福祉研究会会長 本 間 一 夫

中村京太郎は、わが国盲界の先覚者の中でもその筆頭に置かれるべき人であろう。明治13（1880）年の生まれで、明治45（1912）年には既に盲人最初の留学生としてイギリスに渡り、2年間かの地で高等教育を受けているのである。同じく先覚者の熊谷鉄太郎は東京盲学校の教室でその講義を聞いているし、岩橋武夫も失明後の苦悩の中で進むべき道を示され激励されている。

中村は、第1に敬虔なクリスチャンであり、第2に優れた文筆の人であり、第3に活発な国際人であった。中村といえば点字毎日を、点字毎日といえば中村を思い出す人は、今なお少なくないと思うが、大正11年、請われるままにその主筆を引き受けたのも、その後関西盲婦人ホームの創立に深くかかわったのも、人間は神の前には皆平等でなければならない、盲人だけが取り残されては神に申し訳がないという中村の強い信仰と固い意志とによるものであった。

主筆としてのその筆は、必ずしも鋭いものではなかったが、点字毎日巻頭の一文は常により高いものを目指し、物事の明るい面を強調して、読む者の心にともしびを灯し続けたのである。明治・大正・昭和と数度海外に出かけているが、その明晰な頭脳と優れた英語力はその都度大きな収穫を得、まだまだ遅れていて欧米との交流もままならなかったわが盲界に世界に向かっての窓を開いてくれたものである。明治37年という早い時期に台湾に渡って、その盲教育に貢献していたことも忘れてはならないであろう。

要するに中村は紳士であった。それも豊かな教養と風格を身に備えた、英国風の紳士であった。勤のよかったことでも広く知られ、国内はもちろん海外でも人手を借りることを好まず、常にステッキを振って堂々と闊歩していた。点字の読み書きの速さでも抜群で、書くときはタイプライターを用い、

読むときは、私はまさかと思うのだが、両手の指10本を使ったとさえ伝えられている。

昭和11年の3月、私は関西学院受験のため初めて函館から関西へ出ていったのだが、そのとき真っ先に訪ねたのが中村であった。井戸から飛び出した蛙は、不安でたまらなかったのである。点字毎日のロビーでテーブルをはさんで向かい合い、私の話を聞きつつ軽くテーブルを叩きながら、「そう、ああそう」と受け止めてくれている、その物静かな落ち着いた対応ぶりは、私を深く感動させ、「何でも話せる、頼りにさせてもらえる」と思わせたものである。それから3年、関西で学生生活を送った私は、大変励まされて公私ともにお世話になったものである。あるときは点字毎日で、また関西盲婦人ホームで、ときには私の住いにお迎えしたりして、よくお会いする機会があった。そのときどきの思い出は尽きないが、特に中村の素顔に触れて印象に残るのは、関西盲婦人ホームでお会いしたときのように思う。三療で働く若い盲婦人たちを前にして、聖書やイギリスの話をしたり、みんなに囲まれお茶を飲みながらの談笑のときには、高い気品に包まれた、何ともいえない温かさ、優しさが周りに漂ったものであった。奥さまがいつも付き添っておられたことは言うまでもない。

戦後ほぼ20年を中村は東京で暮したのだが、不幸にも晩年奥さまに先立たれてからは、自身も病床に就く日が多かったようだ。いよいよ終りの日が近づいたとき、「お世話をかけて申し訳なかった」と漏らし、急に食欲が落ちたとのことであるが、家人は、自身食欲を抑えたのではないかと語っている。昭和39（1964）年12月24日、「急がなければ」とつぶやいて静かに昇天されたとのことであるが、天国のクリスマスイブを夢見ていたのではないだろうか。気になる話ではあるが、中村の最期を飾るにふさわしい挿話である。

「点字ジャーナル」をはじめ、何冊かの月刊誌の編集の責任者として文字どおり多忙を極めていた阿佐博氏がこの伝記を執筆してくれたことに私は驚くとともに、最大の謝意を表さずにはいられない。

目 次

はじめに	1
第一章 点字毎日と中村京太郎	
I 印刷機のうなりに幻をえがく	3
II 人と舞台	5
III 中村京太郎のアイデアと点字毎日の事業	8
1. 点毎懸賞文の募集	9
2. 盲学生体育大会	10
3. 盲学生雄弁大会	12
4. 点字教科書の発行	13
5. 模擬点字投票と普選講演会	14
IV 国際盲人社会事業会議出席	16
V 大会以後	20
第二章 はるかなる山の呼び声	
I 少年の頃	23
II 東京盲啞学校へ	25
III 普通科教員第1号	27
1. 正則英語学校	29
2. 英国留学の夢	31
3. 同窓会の運営と点字論争	32
第三章 台湾からロンドンへ	
I 台湾へ	34
II 湖の麗人	36
III 英語辞典の点訳	37
IV ロンドンへ	39

V	町田校長	42
VI	英国にて	43
VII	国際会議出席	46
VIII	鉄道運賃割引のこと	47
IX	祖国への提言	48
	1. 幼児教育の充実	48
	2. 初等教育の充実と義務制の実施	49
	3. 職業教育の充実	50

第四章 点字あけぼの新聞の発行

I	帰国	52
II	東洋盲啞教育会議	53
III	全国行脚	53
IV	同愛盲学校時代	54
V	点字新聞『あけぼの』の発行	55
VI	結婚	58

第五章 中村京太郎、その人と世界

I	点毎評壇	61
	1. 本来の盲界を顧みて	62
	2. まず盲教師養成機関の充実を図れ	62
	3. 奨学資金を設けよ	63
	4. 隠れたる盲人の友	63
	5. 鍼按科から物療科へ	64
	6. 高等教育問題	64
	7. 感心な盲学校卒業生	64
	8. 頭の使い方	65
II	盲婦人ホームの設立	65

III	家庭にあって	67
IV	中村流エチケット	69
V	タイプライターをめぐる	71
VI	70歳の一人旅	72
VII	晩年の生活	74
VIII	目を閉じて見るもの	75

は じ め に

一昨年の夏頃だったと思う、日本点字図書館館長の本間一夫氏から「日本盲人福祉研究会で出している盲人先覚者伝記シリーズの中の中村京太郎伝を書くように」とのお電話をいただいた。本間氏は、同会の会長もしておられ、役員会で執筆者として私が選ばれたのでよろしくたのむとのことであった。

私は個人的には中村氏をよく存じ上げている。4歳にして失明した私に最初にアドバイスを与えてくださったのも中村氏であった。学齢期を迎えた私を連れて父が点字毎日を訪問したのである。

私の生家は、最近高校野球で有名になった池田高校に近い、徳島県の片田舎にあり、盲学校に入学するには、どうしても寄宿舎に入らなければならなかった。数年すれば一家をあげて徳島市に居を移し、そこから通学させることもできる事情にあったので、どちらを選ぶべきか父は迷っていた。中村氏のアドバイスは「いそぐことはない。田舎で自由に遊ばせて体を作り、転居できるのであればそれから入学させても遅くない」ということであった。父はその通りにして、4年後に徳島市に出て、それから私は盲学校に入学した。11歳の時であった。しかし中村氏は「点字は早くから勉強しておいた方がよい」と言って点毎で出していた小学教科書や、2・3の点字雑誌とともに、点字一覧表をくださった。だから私は早くから点字を読むことだけは、練習することができたのである。

また中村氏はその晩年を、私が勤務していた筑波大学附属盲学校の近くで過ごされたのでよくお訪ねしたことがあった。ある時「いっしょに読みましょう」と言われて、トーマス・ア・ケンピスの『キリストの模倣び』の二人だけの読書会をしたことがあったが、それは忘れられない思い出である。

しかし実際に伝記を書くとなると、私には荷が重かった。少しずつ資料を

収集するように心がけてはいたが、学校を退職して馴れない点字出版の仕事に移ったばかりで、目前の仕事に追われ、なかなか執筆に着手することができなかった。従って本書の出版が大幅に遅れ、心苦しく思っている。

今、稿を終るに当って顧みると書き足りなかった部分や、表現にもう一工夫したかった個所が何個所もあることに気付く。しかし、ページ数に制限があり、また時間にも追われていて、書き直す余裕がなかったので、その点はお許しいただくほかない。

中村氏を「曲らず歪まず空に向って謙虚に立った巨木のような」と評した人があった。私は中村氏の人格にふれる時、新約聖書コリント人への第1の手紙13章の聖句を想起する。「愛は寛容にして慈悲あり。愛は妬まず、愛は誇らず、驕らず、非礼を行なはず、己の利を求めず、憤らず、人の悪を念はず、不義を喜ばずして、^{まこと}真理の喜ぶところを喜び、凡そ事忍び、おほよそ事信じ、おほよそ事望み、おほよそ事耐ふるなり」

拙ない筆ではあるが、本書によって類いまれな中村京太郎氏の人格の一部にでもふれて頂くことができれば、著者としてはこの上ない喜びである。

第一章 点字毎日と中村京太郎

一般に『点毎』と愛称される『点字毎日』を他にして、中村京太郎を語ることはできない。それは43歳から65歳に至る人生の後半生を『点字毎日』の編集主任として、その仕事に打ちこみ、同時に、我が国の盲界にさまざまな影響を与えてきたからである。彼の足跡を顧みる前に、まずその発刊に至るまでの事情から眺めて見ることにしよう。

I 印刷機のうなりに幻をえがく

1912年（M45）7月5日の朝、中村京太郎は、好本督氏に伴われて、ロンドンのグレート・ポートランド街にある「内外盲人協会」（現RNIB）を訪ねた。同年5月に神戸港を発ち、2カ月かかってロンドンに着いたというから、おそらくロンドンに着いてすぐのことであつたろう。盲人用の地図を工夫したことで知られる同協会の総務主事ステンスビー氏が愛想よく彼らを迎え、親切に協会内を案内してくれた。製版部・校正部などを通して印刷部に行った時、そこに力強いモーターのうなりを聞いた。それは1時間に4,800ページの印刷ができるという最新鋭の点字印刷機のうなりであった。中村はいたく感動し、「これだ！」と独語した。そして「そうだ、もう50年もしたら、日本の盲人も点字を覚え、本を読む者も増えて、こんな機械も使えるようになるであろう。いや、早くそうせねばならぬ」とその胸に幻を描いたという。

ところが、その幻は意外に早く実現することとなった。1922年（T11）6月15日発行の『点字毎日』に「ひと足づつ」と題して、中村自身次のように記している。

「大正11年6月5日午後3時、我点字毎日の印刷室に不意に入った瞬間、言い知れぬ感謝の情に打たれた。見よ、そこにはモーターが盛んにうなっている。大判4ページ刷りが、どしどしはき出されている。しかも、一時間4,000ページの速度で回転しているのだ。まさにこれ、日本点字印刷史上の一新レコード、筆太に記念すべき一日であろうか。あえて同志諸君と共に大いに記念すべきであると思う。かくて、ひと足つつ我が日本盲界は進みつつある。点字新聞の使命また自ら明らかになってきた。はるかに読者諸君の健康を祈る」

我が国で最初の電動式点字印刷機が動きはじめた喜びをつづったものである。おそらく、中村の感動は想像を絶するものがあつたであろう。その喜びが、今も我々の胸に伝わってくるような気がする。

『点字毎日』は、1922年（T11）5月11日に創刊号を出した。大正11年はじめに、点字毎日発刊が決定されると、それまで個人新聞『あけぼの』を発行していた中村京太郎が編集主任として迎えられ、準備にあつた。中村は、「どうせ出すなら外国に負けない立派なものを出したい」というので当時ニューヨークにいた、高田元三郎記者に依頼して、インターポイント式製版機や、印刷機を輸入してもらった。ところが何事によらず事始めには苦労や失敗がつきものである。5月11日の創刊日が近づいても、その印刷機はうまく動かなかつた。一同気をもむことしきりであつたが、用意周到な中村は、こんなこともあろうかと、以前あけぼので使っていた古い印刷機を持ってきており、結局創刊号の発行にはそれらを持ち出さなければならなかつた。2代目編集長の大野加久二氏に後に聞いた話であるが、苦心して創刊号を800部刷りあげたものの、機械の調子が悪くて紙がシワだらけになり、読者から「点毎は生れたばかりでシワだらけ」とやゆした手紙をもらつたりもしたとのことである。しかし、間もなく輸入した機械の運転が可能になり、6月5日には、すでにそのモーターがうなりをたてていたということだ。1カ月に満たずして事業は軌道に乗つたことになる。

Ⅱ 人と舞台

『点字毎日』の創刊は、当時の我が国としてみれば、劇的なでき事であった。一つの劇が演ぜられるためには、人と舞台が必要であるが、このことのために、あたかも天の配剤とも思えるような、4人の人物と二つの舞台が備えられたのであった。人物としては、好本督、河野三通士、本山彦一、それに中村京太郎であり、舞台としては、ロンドンと大阪であった。

4人の人の中で、表面にはあまり出ないが、このシナリオに筆を染めるのに深くかかわったのは、やはり好本督氏であろう。彼は網膜色素変性のために生来視力が弱かったが、1900年(M33)東京高等商業学校(現一橋大)を卒業し、直ちに英国に渡って、オックスフォード大学に学んだ。一時帰国したが、1908年(M41)に再び渡英し、オックスフォードハウスと称して貿易商を営んだ。それで上った利益は、大半盲人救済の資金に投ずる決心であった。彼は、盲人の社会における地位の向上を願い、一方において優秀な人材を見出して、これを育てると共に、他方キリスト教の伝道にこそ真に盲人を救済する本筋があると考えて「盲人キリスト信仰会」を設立し、その育成につとめた人である。こうして彼に見出された人々の中に、熊谷鉄太郎、中村京太郎、平方竜夫、秋元梅吉などがあつた。そして、熊谷鉄太郎氏は、好本氏の奨学金を得て関西学院に学んだし、中村京太郎は、英国に留学を実現した。

中村の留学と時を同じくして、明治末期から大正4年の春にかけて、河野三通士という人が大阪毎日新聞社から特派員としてロンドンに派遣されていた。そこで河野氏は好本氏や中村とめぐり会い、交わりを深めるのである。河野氏は次のように書き残している。

「大正元年であつたと思う。ロンドンで、一人の盲人留学生に会つた。それは中村京太郎君であつた。まだ洋行が大層がられた時代、盲人でありながらシベリヤを一人旅でやって来たと聞いて、少し驚いた。もっと私の驚いたのは、“盲人だって心配いらぬさ”と云つて中村君の旅費から留学費の一

切を出して、イギリスまで引っぱり出してきた男があると聞いたことだが、それが好本君であった。（シベリヤの一人旅は帰国の際のことで、河野氏の思い違いだろうと思われる）

こうした交わりの中で、非常に印象的な会話が行なわれたことが知られている。1912年（T 1）の夏のある日のことである。好本氏と河野氏はオックスフォードの郊外を散歩しながら、母国日本のことなどを偲んでいた。その時、好本氏が「君は罪滅ぼしをしなければいけないね」とぼつともらした。そして二人の間に次のような会話が交わされたというのである。

「罪滅ぼし？まだそんな悪いことをした覚えはないが」

「いや、君の友人が悪いことをしている」

「僕の友人？誰だそれは、名前を聞かせてほしい」

「その名を新聞記者という。君やあるいは君の社はそうでないかも知れないが、とにかく記者には意識的にか、無意識的にか罪づくりが多いのは事実だ。新聞社はいろいろな事件や出来事を、何の気なしに報道しているが、その陰には、きっと悲しい思いや、世間に恥かしい思いをする人がある。だから、よしんば君は悪いことをしていないからと言ってすましているのはよくない。大いに善根を積んで同業者の罪滅ぼしをしたらどうか」

「何かいい方法でもあるのか？」

「君の新聞社で点字新聞を出すことだ。たのむ！」

舞台はロンドンである。出演者は好本督氏と河野三通士氏である。それに中村京太郎が加わっていたとの説もある。好本氏は既に、点字新聞の発行を構想しており、英国などの先進的な盲教育や、福祉のあり方を、福祉の後進国であった日本に紹介し、有識者を目覚めさせることも大きな救済事業であると考えていた。そして以上のような会話によって、その理想実現への第一幕を演じたのであった。

時は流れて、それから10年が経過した。舞台は大阪に移る。大阪毎日新聞社は、社屋を新築して、大川町から現在の堂島に移転した。その時5代目社長として、本山彦一氏が在職していたのは実にタイムリーであった。

本山氏は、元東京盲啞学校長の小西信八氏と親交があった。小西氏はカナキチガイと言われるほどのカナ文字論者であり、本山氏もまた国字改良論者で、小西の主張に共鳴していた。小西はもちろん点字を知っていた。点字はすべてをカナ方式で表記する。それで十分に意味が通ずるのである。小西氏が本山氏に、点字について話したことは容易に想像がつく。本山氏は点字に興味を持ち、それによって盲人問題にも関心を示すようになっていた。

毎日新聞では、社屋新築の記念事業として、『サンデー毎日』を創刊し、他に『エコノミスト』や『英文毎日』なども発刊された。それと同時に『点字毎日』も呱呱の声をあげることとなり、大正11年5月11日を迎えることになるのである。いうまでもなく、点字新聞は利益を度外視した事業である。本山氏の英断は高く評価せらるべきであるが、その陰に、河野氏の大きい働きのあったことも見逃してはなるまい。河野氏は「言葉の力」という手記の中に次のように記している。

「あれから10年の歳月が流れた。毎日新聞社で新築記念に『何かいい仕事になかろうか』という議題が出された時に、私の頭に“罪滅ぼし”という一つの言葉がひらめいた。点字新聞はこうした縁で生れたものである。そしてあの時の中村君が、今主筆として働いているのだ。“初めに言葉あり、言葉は神とともにあり、言葉は神なりき”と聖書にある。点字新聞は罪滅ぼしの一語によって生れた。私も言葉の力を信じてこの仕事をしているのだ」

言葉には力がある。好本氏の「罪滅ぼし」の一語がロンドンから大阪に舞台を移して見事に実ったのである。点字新聞の発刊が計画されると同時に、その主筆として中村が迎えられた。点字毎日の発刊に至る第2幕はこうして演ぜられたのであった。

その日から数えて65年、この新聞は週刊誌として発行し続けられ、1987年（S62）3月1日号で、3,328号を重ねている。なお、正式名称としては最初『点字大阪毎日』と呼ばれていたが、親新聞の大阪毎日新聞が『毎日新聞』と改題されたのを機会に、1943年（S18）1月7日付、通巻1,078号から『点字毎日』と改題され、また、従来木曜日に発行されてきたのを、1945年（S

20) 1月から日曜日発行と改めて現在に至っている。



大野加久二氏
長岡加藤治氏
中村京太郎氏
好本 督氏
河野三通士氏
鳥居篤治郎氏

Ⅲ 中村京太郎のアイデアと点字毎日の事業

「点字大阪毎日はいよいよ本日第1号を発行します。発刊の目的は、失明者に対して自ら読み得る新聞を提供し、本社発行の各種の新聞と相まって、新聞の文化的使命を徹底せしめんとするに他なりません。かくして、一方には盲人に対し、1個の独立せる市民として社会に活動するに必要な、知識と勇気と慰安とを与え、他方には、これまで盲人に対して、眠れる社会の良心を呼び覚さんとするにあります」

これは点字毎日第1号に中村が記した発刊の言葉の一部である。盲人に各種の情報を提供して、各自が人間として向上することを願い、他方、一般社会に呼びかけて、盲人に対する理解を深めようとする中村の理想をその中に

うかがい知ることができる。

しかし中村は毎日新聞という大組織をバックに、点字新聞という情報のメディアを手中にした大きい喜びと共に、責任の重さも痛感したにちがいない。考えてみればそれまでの彼の人生は、この日を迎えるためにあったようなものであった。英国に留学して見聞を広めたこともそうであったし、細々ながらも個人新聞を発行して経験を積んだこともそうであった。理想の花が一度に開いた気分にもなったことであろう。好本督氏が願っていたことも情報提供による我が国盲界の啓発ということであった。いま自分がその情報のメディアを手にして、好本氏の恩に報ゆる喜びにもひたったことであろう。かつてロンドンで、印刷機のモーターのうなりを聞いて描いた幻が、いま現実のものとなり、彼の胸には多くのプランやアイデアがうずまいたことであろう。それらの一つ一つ仕事を通じて実現していくことになるのである。

ただ残念なことは当時は点字を読み得る盲人は微微たるものであった。点字を使っているのは盲学校の生徒かその卒業生に限られていた。だから当面はそれらを対象として考えなければならなかったが、彼は全国2万人の盲人に点字を教え、この新聞を読ませたいと願っていた。その頃我が国の盲人の数は2万人と言われていたのである。そこで当然考えられるのは、点字の普及ということであった。中村は一方において、点字教科書の出版に意を注ぐと共に、他方点字投票などを通じて点字の普及に努めた。それと共に盲学校生徒の活躍の場を広げる事業も計画していた。勿論それらは毎日新聞社という大組織を背景としたものではあったが、中村のアイデアから出たものが多く、また企画推進も彼によってなされたのであった。それらの事業の幾つかを眺めてみることにしよう。

1 点毎懸賞文の募集

1922年（T11）8月に点毎は第1回懸賞文募集を行なっている。課題は「私のうれしかったこと」とある。の年の8月といえば、点毎発刊3カ月後のことである。その時点において中村は早くも読者に呼びかけ、その反応を見よ

うとしたのであろう。意気盛んな彼の姿勢を見る思いである。

この企画に対して 131 名の応募者があった。10月にはその入選者が発表されているが、入選者の中には、天王寺盲学校（現大阪府立盲学校）の校長志岐与市、後に陽光会を設立して盲女子の教育に力を注いだ齊藤百合、鍼灸マッサージの大家として知られ「三療」という言葉の創始者といわれる石川の三谷復二郎、群馬盲学校の教員で近世盲界事情に明るい栗原光沢吉などの氏名が見えている。各層の人々が中村の意気に感じて投稿したことがわかる。

2 盲学生体育大会

中村は自らも運動に興味を持っていた。彼が富士登山をしたことなどもエピソードとして残っている。ある人が「中村さん富士山に登って日の出が見えましたか」と聞くと彼は笑いながら「私は日の出を見るために登ったのではありません。盲人でも富士登山ができるということは、目のあいている人を勇気づけ彼らを救うことができると思ったから登ったのです」と答えたというものだ。彼はそれまでの仕事や、ひとり旅や、その他さまざまな経験を通して、盲人も体を鍛え、運動神経の敏捷性を養っておかなければならないことを痛感していた。そうした体験が「盲学生体育大会」という発想となって実現したのであろう。

1925年（T14）10月11日、点字毎日主催の「関西盲学生体育大会」が開催され、帝国盲教育会近畿部会がこれを後援した。会場は大阪市立運動場で、近畿を中心に、東海・九州などからの参加もあり、12の盲学校が集まった。これは従来の盲教育の殻を打ち破って、盲学生の視野を広める目的もあり、「世界最初の試みで我が国盲教育史上特記すべきことだ」と『激動の半世紀』にも記されている。種目としては、トラックでは全盲 100メートル、弱視 200メートル・400メートル、その他 200メートルの2人3脚、フィールドでは立幅跳・走り幅跳・砲丸投げなどが行なわれた。これが後の「全国盲学生体育大会」の原形となるのである。

この大会が機縁となって、「盲学生体育連盟」結成の動きがおこった。す

なわち、翌1926年（T15）9月24日、帝国盲教育会近畿部会は天王寺盲学校で競技会を開催し、「盲学生体育連盟」の旗上げを決定する。そして同年11月12日、早くも、盲学生体育連盟主催、点字毎日後援の「第1回全国盲学生競技大会」が大阪市立運動場で開催されるのである。

この大会の様様につき中村は、『帝国盲教育雑誌』第6巻第3号（昭和2年1月30日発行）に報告文を寄せている。それを見るとこの大会の様子をつぶさに知ることができる。一部を抜粋してみよう。

「帝国盲教育会近畿部の主唱によって、今回組織された、盲学生体育連盟では、点字大阪毎日後援のもとに、大正15年11月12日大阪市立運動場において、全国盲学校生徒陸上競技大会を開催した。参加盲学校は、新潟盲学校・横浜訓盲院・岐阜訓盲院・柳川盲学校・大分県立盲啞学校・福井盲学校・彦根盲学校・和歌山県立盲学校・京都市立盲学校・天王寺盲学校及び大阪市立盲学校の11校。出場選手総数150余名。その他各盲学校より応援のため職員生徒多数来阪。11月には珍らしい小春日和、盲学生の陸上競技大会に絶好の天気である。各校の応援団は、朝早くより場内に押しかけ、正面のスタンドはたちまちにして黒山のような人でうづまってしまった」

この報告書において、中村は更に、大会の様子や、その前日おこなわれた歓迎会の模様、更に大会後もたれた反省会の様子なども記している。

面白いのはすでにワイヤー・レースがおこなわれていることだ。これについて彼は次のように記述する。「先ず最初に第1部全盲のトラック競技。全盲のコースについては昨年末研究を重ね、幅10メートルのトラックに太い針金7本をひっばって100メートル直線コースを七ツ作りその針金に真鍮のパイプを通し、選手はそのパイプを持って走るのであるが、決勝点のところには、針金に座ぶとんを巻きつけておく。走ってくると真鍮のパイプがこの座ぶとんに衝突し、軽い抵抗を感ずるので、走者は決勝点を通過したことを自覚して止まる」この方法はその後長く行なわれ、筆者なども学生時代に、この方法によって足を鍛えたものであった。

歓迎会には毎日新聞本社からも多数出席し、殊に我が国初の女子オリンピ

ック選手人見絹枝嬢が当時本社運動部の記者をしており、「大講演を行なった」とある。盛大な歓迎会の様子が偲ばれる。

反省会には参加盲学校の職員40余名が出席し、本社運動部記者による専門家の立場から見た有益な批評などもあり、その他、(1)盲学生体育連盟の組織を全国的にすること、(2)競技種目に相撲を加えること、(3)競技大会は当分の間大阪において開催すること、などの希望のあったことも記されている。

3 盲学生雄弁大会

盲学生に希望を与えなくてはならない。また、批判精神を養わなければならぬ。希望は語ることによって一層意識が高揚し、批判精神は吐露することによって物事に対する関心の度も一層たかまる。そう考えて盲学生陸上競技大会に次いで中村が発想したのが雄弁大会であった。この計画が発表されると、盲学生の間には、急に雄弁熱がたかまった。そして1928年（S3）6月24日に点字毎日主催の第1回全国盲学生雄弁大会が、毎日新聞本社を会場として開催された。参加校は16校。その演題を見ると、「吾人の進路」、「盲学生の叫び」、「特殊教育の充実と盲人の使命」、「混沌より黎明へ」、「人間なるがゆえに」、「青年の叫び」、「自ら開け」、「求めよさらば与えられん」などがあり、当時の盲学生の気持の一端をうかがうことができる。なお出場者の中に、後に香川県立盲学校長になった横田善次氏の名前も見えている。

その後この雄弁大会は毎年行なわれ、この大会への参加は、心ある盲学生の憧れの的となった。しかし、出場者は1校1名に限られ、その派遣選手を選ぶために各校において、校内雄弁大会がしきりに行なわれた。こうして次第に雄弁熱がたかまり、各地区における雄弁大会も行なわれるようになった。その頃雄弁の研究を行なうことを目的として「都内盲学生雄弁連盟」なども発足している。1930年（S5）5月のことで、東京には東京盲学校を始め、築地・杉山・同愛・仏眼などの盲学校があった。

この盲学生雄弁大会は、形を変えながら現在も行なわれているが、特に昭

和初期における盲学校の華やかな行事として発展したのであった。

4 点字教科書の発行

点字の普及は、中村の最初からの念願であった。その一環として、点字教科書の発行も計画されるのであるが、それにはいささかのいきさつがあった。1921年（T10）秋、奈良盲学校長小林卯三郎氏は、大阪毎日新聞社事業部長橋詰良一氏に請い、盲学校用点字教科書出版について、3,000円の資金援助を受けることができた。そこで、小幡金一（京都市立盲啞院出身）、橋本喜四郎（大阪市立盲学校出身）らと相談の上、毎日本社からも数名のスタッフの参加を求めて、1922年（T11）1月に、「点字教科書刊行会」を結成した。この会では、尋常高等小学校用国定教科書の出版を計画し、同年4月にはその一部を全国に発送することができた。しかし、点字印刷設備が不完全だった上に、従業員の不馴れや、その他経済上の事情などもあって、この事業は行き詰まることとなった。そこで、翌1923年（T12）2月に、点字毎日がその事業を継承し、国語・修身・算術・理科・歴史・地理の各教科にわたって順次出版することとなったのである。これは盲学校教育にとって画期的なことであり、盲教育の進展に大きく貢献することとなった。大正末期から昭和初期にかけて、盲学校初等部に在籍した者は、すべてこれらの教科書によって学習したのであるが、整然とした表音的表記と、分節分ち書きがなされており、現在行なわれている点字表記の基礎を固めたものといえる。

その後、盲学校関係者から、盲学校用教科書の必要性について声が上がった。これに応じて、1927年（S2）文部省に「盲学校教科用図書調査委員が置かれたのに続いて、翌1928年（S3）3月25日、「盲学校教科書編纂委員会」が開かれた。そして広く全国的に学校現場の意見を反映させるために、各地の盲学校長などが編纂委員として委嘱されたが、その委員中に中村の名前も見えている。その結果、初等部の国語教科書から編纂を始めることになり、翌年4月に第1巻が点字毎日から出版され、1934年（S9）に全巻12巻の出版に漕ぎつけている。

続いて他の教科書にも及ぶのであるが、このように中村は教科書の出版に意を注いだ。なお、この国語教科書の表記について一言ふれておくと、エ列長音がすべて長音符によって表記されている。これは長音化も少し行き過ぎではないかとの説もあるが、「書き方は国語調査会で決定した書き方を更に改良して、発音主義によること」との編纂委員会の意見に従ったものと思われる。

教科書についてはもう一つ特筆すべきことがある。点字地図の製作である。それは、点字毎日が独自の図形製作機によって作ったもので、地理教科書の付図として1931年（S 6）10月に、日本地図及び世界地図が完成している。筆者も実際にそれらを使って学習した一人であるが、点図の表現にも工夫が凝らされ大変わかり易いものであった。中村はかつてロンドンの「内外盲人協会」において、ステンスピーの製作した地図などを見てきていたので、そうした知識が生かされたものと考えられる。

5 模擬点字投票と普選講演会

1925年（T 14）は、我々視覚障害者にとって一つの記念すべき年となった。それは第50議会において、普通選挙法が制立して5月5日に公布されたが、それに先立って3月29日に点字による投票が認められたからである。

これを祝って各地で大祝賀会が催された。すなわち4月18日には、中心になって、点字投票を認めさせる運動をしてきた「愛知県盲人点字投票有効規正連盟」主催の「点字投票有効全国盲人大祝賀会」が行なわれたし、5月26日には、近畿の各盲人団体と「盲人文化委員会」共催、点字毎日後援の「普通選挙実施と点字確認記念全国盲人大会」が開催された。この盲人文化委員会というのは、熊谷鉄太郎・岩橋武夫・鳥居篤次郎・小林卯三郎など関西在住の有識者が中心になって、盲人の文化運動を起そうとして作った組織である。この大会では次のようなことが提案され決議されている。

- (1) 点字普及の徹底を期するの件
- (2) 府县市町村会選挙にも点字投票の有効を期するの件

- (3) 全国の鍼灸按摩マッサージ試験に点字を採用するよう要望するの件
- (4) 盲教育を速やかに義務教育とせられんことを要望するの件、など。

時あたかも1875年（M8）5月22日盲教育の開始を目的として「楽善会」が組織されてから50年目にあたり、東京と京都で盲教育50周年が祝われた年でもあった。

こうして点字は文字としての市民権を得るための第1歩をふみ出したのであるが、点字についてもまた、選挙そのものについても一般盲人の関心は未だしの感があった。「模擬点字投票と普選後援会」はそうした中で盲人に与えられた最初の点字投票を最も有意義に行使させることを目的として、1927年（S2）9月12日、大阪の中之島中央公会堂を会場として行なわれたものである。間近に衆議員選挙が行なわれることが予想された時でもあり、時宜を得た試みということができよう。

この模擬投票は、実際の投票所そのままの会場を設営し、5名の仮候補者を立て本場そのままの手続きをふんで投票を行なうというものであった。投票箱も実物を用い、点字器も大阪府庁から貸与された投票用点字器を用いた。仮候補者には伊藤博文・大隈重信・原敬・板垣退助・加藤高明など有名政治家が立てられており、真剣な中にも中村のユーモアが感じられる。

この日、正午前より押しかけた盲人有権者は、まず受付で投票用紙をもらい、受付の左右に設けられた10カ所の投票記入所で、思い思いに仮候補者の氏名を記入し、それを中央にしつらえられた投票箱に入れて投票をすませ、それから会場に入った。来会者は付添者なども入れて1,000名に達したという。ここで講演が行なわれたのである。プログラムを見ると

- (1) 普選になるまで……大毎事業部長 伊藤金次郎
- (2) 普選の話……大阪府警察部長代理 横関警部補
- (3) 点字投票について…大阪府吉田地方課長
- (4) 盲界の前途……点毎主筆中村京太郎

とある。中村が盲界の啓発のために、その理想を語ったことが想像される。

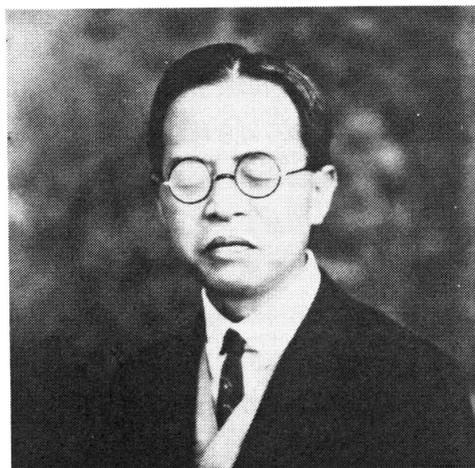
一方投票は2時で打切られ、直ちに開票にうつった。投票総数は487票、

有効投票 384 票、無効投票 103 票であった。なお有効投票 384 票のうち、氏名を正確に書いた者は 281 票、判読によって氏名の推定出来た者 103 票、無効投票 103 票のうち、氏名が確認できなかった者45票、候補以外の氏名を記入した者24票、白紙16票、他字記入14票、2人以上の候補者を記入した者が4票あった。昭和初期における視覚障害者の点字習得の状況や、選挙についての意識などが知られる数字である。

ちなみに候補者別投票数は、原敬 111 票、伊藤博文 106 票、加藤高明69票、板垣退助55票、大隈重信43票であった。

IV 国際盲人社会事業会議出席

1931年（S6）4月13日から3週間にわたって、ニューヨークにおいて「国際盲人社会事業会議」が開催された。これはアメリカのフーバー大統領の肝入りで行なわれたもので、我が国にも招請状が来た。それに応えて、文部省は、秋葉馬治東京盲学校長を団長として7名の代表団を派遣した。その中に、点字毎日主筆として中村京太郎が加えられたのはいうまでもない。代



昭和6年サンフランシスコにて

表団は秋葉・中村両氏の他に、橋村徳一名古屋市立盲啞学校長・木村謹吾台北洲立盲啞学校長、木村柳太郎東洋点字新聞主幹・熊谷鉄太郎、日本メソジスト宇部教会牧師、及びサンフランシスコ在住の田守吉弘の諸氏であった。それにオブザーバーとして馬淵曜横須賀聾学校長が加わった。田守氏は中村の知人で福岡盲学校卒業後、両親のいるサンフランシスコに渡って、マッサージを開業している人であった。アメリカの盲界事情にも通じており、プライベートな形ではあったが、彼は点毎のためにアメリカ通信員の役目をも果たしていた。田守氏が日本の代表団に加えられたのはもちろん中村の推薦によるものである。中村は団長の秋葉氏に「田守氏は点字毎日の北米通信員であることは間違いありません。ただ、社の都合で、まだ正式に社員とは言っておりませんが、私から非公式に通信を依頼し、事実において絶えず通信を受け、かつ、紙上に転載しております」と報告している。田守氏は少し視力もあり、中村にとっては、よいガイド役であった。

田守氏の代表団への参加が決定した時、中村は「万事は兄に一任。いずれすべては3月25日サンフランシスコに着き次第直ちに兄を訪問の上、お打ち合せして私のプログラムを決めるようにして頂きましょうか。一行は途中各都市に立ち寄り、会議までにニューヨークに着くようにするとのことですが、私は一寸前に一行と別れ、一行よりも1、2日前にニューヨークに着きたいと思います。兄もそうお願いできれば幸いです」と書き送っている。

中村はこの会議に出席するにあたって、会議とは別に大きな希望を持っていた。それはヘレン・ケラー女史の来朝を確約すること及びリーダーズダイジェストの日本語点訳の承諾を得ることであった。そして、この二つの目的をも果している。

中村のこの会議への出席を、バックにある我が盲界も歓迎していた。「日米親善は盲界から」とのメッセージと共に、京都・大阪市・大阪府・兵庫の4盲学校から「黒いお目目の人形」が中村に託された。これらの人形は、アメリカの各盲学校に送られると共に、ヘレン・ケラー女史にも贈呈された。

参加国はイギリス・フランスなど欧州列国をはじめ中国・インド・オース

トラリア・ニュージーランド・コロンビア・チリ・メキシコなど37カ国におよび、まさに国際会議の名にふさわしいものであった。出席者も300人を数え、主催国アメリカを除けば、我が国からの出席者はイギリスの10人に次ぐ数であった。中村はこのような国際会議に出席するのはこれが2回目である。最初に出席したのは、1914年(T3)ロンドンで開かれた「盲人国際会議」である。その時の日本代表は、英国留学中の中村一人であった。あれから18年になる。今回は堂々と7名の派遣団を送ることができた。それだけ我が国の盲人に対する関心度も深まったということになる。それには点字毎日の果してきた役割も決して小さくはなかったであろう。中村は愉快であった。

開会式はニューヨークのリバーサイド・ドライブのインターナショナル・ハウスにおいて行なわれた。開会の挨拶に立ったのはヘレン・ケラー女史であった。「最早今日はただ一つの国がいかに奮闘努力しても、全人類の文化は決して向上するものではない。各国民が協力一致して、国際的に全世界の盲人の福祉に向って邁進しなければならない時である。我々の願いはただそれだけである」との主旨であった。この挨拶は各国代表に大きい感銘を与えた。

本会議は翌日から4日間、ペンシルバニアホテル18階の大広間において行なわれた。議題は盲人に対する教育・職業・救済・保護及び失明防止などにわたり、各国代表のうん蓄を傾けた発表があった。

会議は午前9時に始まり、講演や討論が行なわれた。そして午後から夜にかけては、それぞれの専門分野に分れて、円卓会議が持たれた。それに歓迎会や晩餐会なども加わってハードなスケジュールであった。中村も毎日新聞社事業部で作成した、日本における失明防止運動や、開眼検診の状況、及び全国盲学生体育大会の様子などのフィルムなども公開してくわしく説明した。また点字定期行物などの分科会においては、点字毎日の様子を説明し、同時に教科書などを発行していることをくわしく述べて、出席者の注目を集めた。なおこの分科会において議長を勤めた、マチルダジグラー主幹のホームズ氏が「日本でさえも点字週刊新聞を発行している」と発言したことに対し、

「日本でさえもとの議長言葉には承服できない」と中村がつめ寄るひとこまもあったという。

本会議終了後約2週間、出席者一同はアメリカ各地の盲人に関する代表的施設を見学して廻った。その間ワシントンに立ち寄ってホワイトハウスを訪問し、今度の会議の名誉会長であるフーバー大統領に敬意を表した。その際大統領夫人は特に中村に、点字毎日発行について質問し、彼の労苦を労われた。その夜フーバー大統領から「諸君、人道のため努力せよ。本日の如き感激は実に余のかつておぼえなかったところである」とのメッセージがとどいた。

この会議で忘れてならないことがもう一つある。それは常設委員会が組織され、アジア地域の代表として好本督氏が選任されたことである。中村の推薦によるものであった。今自分がこの晴の舞台に出席できたのも好本氏の知遇を得たことにほかならないことを忘れず、その恩義に報いたかったのである。

中村にとってこの会議の収穫は大きかった。特に彼が興味を持ったのは次のようなことであった。

(1) アメリカにおいてはすでに数十年前から、一般高等教育機関が盲人に開放され、非常な成績を修めていること。

(2) ドイツで盲人の雇用率を定める法律を制定し、民間会社に一定律で強制雇用の義務を負わせていること。

(3) 各国で盲人に対しラジオの聴取料を免除したり、半額程度でラジオセットが購入できる割引券を交付したりして盲人のラジオ利用に力を入れていること。

(4) 交通機関の盲人に対する割引制度が行なわれていること。

(5) アメリカの各図書館には、点字書籍が充実しており、点訳奉仕活動が盛んに行なわれていること。

(6) 一般の小学校などに弱視学級の置かれていること、など。

帰国後中村は「ドルの国アメリカの真似を1から10までぜひしてほしいと

は言わないが」としながらも、我が国でも実現の可能性のあるものとして、次の提言を行なっている。

- (1) 盲人に対し義務教育制度を実施すること
- (2) 高等教育機関の開放
- (3) 公立図書館に点字図書部を設置すること
- (4) 小学校に弱視学級を特設すること
- (5) 盲人に対するラジオの普及に努めること
- (6) 盲人の付添者に対する交通機関の運賃割引または免除を実施すること
- (7) 盲人に対する職業保護政策を確立すること（昭和6年中央盲人福祉協会発行の報告書）

これは中村の卓見と言うことができよう。それから50年余を経て、福祉国家を標榜する我が国において、この時の中村の提言のかなりの部分は実現することができた。しかし高等教育機関の開放は今一步だし、盲人に対する職業の保護政策の確立に至ってはほとんど成果を見ていない。中村の理想実現こそが、盲人にとって、真の福祉になることを改めて痛感させられる思いである。

V 大会以後

3週間にわたる会議が終ると、各代表は自由行動に移った。中村もその後約2カ月間、田守氏と共にアメリカの各地を巡って、盲学校や盲人施設を見学した。この旅行中中村はなるべくホテルを利用せず、盲学校の寄宿舎に泊めてもらった。それは盲学校の実情を直かに感じとろうとする深い思慮に基づくものであった。

中村が訪ねたのは、カリフォルニア・カンサス・ミズリー・コロラドの各州立盲学校及びフィラデルフィア・ニューヨーク・パーキンスの各私立盲学校などであった。これらの学校を訪ねると、どの学校でも、茶話会・音楽会・討論会などを催し、遠来の客として歓迎してくれた。これに対して中村は

ユーモアを交えて礼を述べた。中村のユーモアは至るところで人気を博したという。

カンサス盲学校を訪ねた日はちょうどイースターサンデーにあたっていた。当日は市内在住の失明婦人とその関係者によるイースターの集いがあった。その席上中村は日本における失明夫人の生活について講演した。その様子が新聞で報道されて、他の婦人団体からも講演の依頼があり、予定した日程を変更しなければならないひと幕もあった。

中村と同行した田守氏は「滞在60日の間、文字通り東奔西走、アメリカ大陸を西から東へ、南から北へ駆けずり回った。何分不慣れな土地でしかも数々の不自由に耐えることは容易でなかったが、それにも屈せず、アメリカにおける盲教育をはじめ、盲人の実情をつぶさに学ぼうとする彼の熱意に心を打たれた」と書き残している。

この旅行におけるもう一つのエピソードがある。予定の視察を終えてから小西信一氏を訪問したことである。信一氏は中村の恩師小西信八氏の令息である。信八氏は中村が東京盲啞学校在学当時の校長であったばかりでなく、その後も有形無形の指導援助を受けた大恩人である。信一氏はアメリカ留学中であったが、しばらく音信が絶えていた。渡米にあたって中村は小西先生から「信一の消息をたずねてみてほしい」との依頼を受けていた。たまたまシカゴに立ち寄った際、同地のYMCA主事島津氏の出迎えを受けた。早速信一氏の消息をたずねると、彼は目下自動車事故のためデンバーの病院で療養中だとのことであった。中村は早速病院へ打電した。ところが面会謝絶の返電を受けた。しかし、中村は病院をたずねることを決意する。ロッキー高原にあるその病院まで5千キロの道のりであった。

病院に着くや来訪の事情を告げ、信一氏への面会を懇請した。病院側も彼の誠意に感じてこれを承諾してくれた。やがて、信一氏は看護婦に付き添われ、松葉杖についてロビーに現れた。堅い握手がかわされた。中村は父君の意志を告げ、共に感涙にむせびながらの握手であった。

帰りの汽車の中で中村は田守氏に「これでアメリカへ来た甲斐があった。

恩師へのこの上ないみやげができた」としみじみ語ったという。彼の人間性の一面を語るにふさわしい話とすることができよう。

因みに信一氏はその後傷癒えて、留学の目的を果し帰国したとのことである。

立ち読み版はここまでとなっております。

続きをお読みにになりたい場合には
社会福祉法人 視覚障害者支援総合センター
までお問い合わせください。

盲先覚者伝記シリーズ No. 4

中村京太郎

— 目を閉じて見るもの —

1987年3月31日発行

定価 800円（送料 200円）

著者 阿佐 博

発行者 本間 一夫

発行所 日本盲人福祉研究会

発売元 日本点字図書館用具部

〒160 東京都新宿区高田馬場
1-23-4

電話 03(209)0241

振替口座 東京 5-44522

印刷・製本 東京墨田 合同印刷株式会社

〒130 東京都墨田区業平
2-9-13

電話 03(624)6111

日本盲人福祉研究会

定価800円
